

ユニコーンズ OBOG の皆様

先日は、三田会総会の中で、自粛から解除にいたる経緯を説明する機会を与えて下さり、誠にありがとうございました。事件、ならびにその背景は、あくまでも部の問題であり、部員の問題であること、それ故に、これらの問題を扱うのは部長であり、塾・大学であるという構造をご理解いただけたと思います。情報の統制、一元化は塾からの指導であり、これを三田会会長に認めて頂いたという経緯があります。この情報の統制が、最終的には関係者を守ることに変わったことは後になってから私も実感したところでありました。一方で、最大の支援者であるアメリカンフットボール部三田会の皆さんは、このような有事においてはあくまでも外部者であるため、自粛中に情報を開示することはできませんでした。皆さんへ情報を開示することができないこと、結果としてないがしろにしてしまう行為は本当に申し訳なく思っていました。三田会会長からは、「沈黙を守り抜きますので、部の再生、自粛解除に向けた指導をお願いします」と背中を押してもらい、吹っ切れることができました。本当に感謝しています。

総会でのやりとりを聞かせてもらい、いくつか思うところがありました。三田会の役割とは何なのかを改めて会員の皆さんが世代を超えて共有する時が来たと思います。偉大な精神療法家の言葉に、「関与しながらの観察」という言葉があります。患者－治療者の関係性とはこうあるべきだという言葉です。これは、子と親、学生と教員、部と支援者、様々な育成の場面で応用できます。この反対の言葉は、「関与しつつ介入もする」になります。話し合いで見られた提案のいくつかは後者になっており、これでは益々、学生の主体性を奪いかねないと危惧しました。たとえば、部員数の問題については、学生も認識しております。塾体育会からは、入部で制限をしないようにと指導を受けています。この少子化の時代に、当部に多くの学生が入部してくれることをまず喜ばなければなりません。人数の多さを武器に変える仕組みを作ることについて、学生はワーキンググループを作り、学生が考えています。部の問題を大人がすぐに介入して解決することは、外から組織を見たときには良いのですが、部の主役である学生にとって一つも良いことはありません。これは、学生が問題解決から学ぶ機会を奪う行為にほかなりません。私がプロコーチを留任させるように強く三田会に掛け合った理由の一つはこれになります。他にも理由がありますがここでは述べません。三田会、父兄が問題を共有し（関与する）、黙って見守ること（観察）が、育成における常識であり、この常識を皆さんと分かち合って、部員の成長を信じませんか。

私が皆さんに期待する支援は、1) 部活動中の安全を確保するための支援、2) 財政面での支援、3) 夢をもたせる支援の3つです。1,2 についてこれまで十分に部は享受しています。引き続きお願いします。3 については、こんな素晴らしい先輩に会えて良かった、あんな素敵な先輩になりたい、という皆さん個人の生き様を提示することによる波及です。これも学生へ部活動を続ける動機を与えます。競技の日本一をユニコーンズは目指していますが、同時に人格者の日本一も目指すべきだと思います。そのために3を今ここで強く要請します。

2020.5.24

部長 田中謙二